うれしい ひなまつり

きものをきかえておびしめて　きょうはわたしもはれすがた・・・「うれしいひなまつり」の歌にうたわれているように、3月3日の桃の節句ひな祭りは、女の子にとってひと際思い出の多い行事のようです。

時代時代でひなの形は変化していますが、無病息災、子どもの成長を願った祭りであることに変わりはありません。

今月号では、ひなまつり、おひなさまにまつわる思いを伺いました。

我が家のおひなさまたちに

堀口　正仁さん（鶴馬）

私の母は、幼少期に左手の筋を悪くし不自由な身となったそうです。体の不自由さからか人一倍勝気で健常者と区別されるのを一番嫌っていたようです。

その母が晩年、不自由な体で打ち込んだのが木目込みのおひなさま作りでした。今も毎年2月の声を聞くと飾り、母をしのんでおります。

我が家には母が作ったおひなさまを筆頭に妻のおひなさま、娘のおひなさま、孫娘のおひなさまと時代を反映したおひなさまが四代にわたって存在しております。

ひとり娘も嫁ぎ、飾る場所を確保することはできますが、自分自身の体がついていかず、毎年気が付くと時期が過ぎているのが現実です。

今年を機にいち世代ごとに順番に飾ろうと考えております。

男にはわからないが・・・

藤田　興二さん（鶴馬）

戦後、愛媛の田舎に生まれた妻は、ひな人形を買ってもらえなかったという。昭和49年に長女が生まれた時、うれしくて浅草橋に行って七段飾りを求めてきた。娘との共同のお人形のように毎年飾って楽しんでいた。

平成11年にその長女が結婚する時自分のものとして持っていってしまった。妻は自分のおひなさまがぜひ欲しいと幼い時の思いが大きくなったようだ。

1年前、家を新築することになり、妻の思いをかなえてやろうと飾る場所は限られているが、親王飾りだけのおひなさまを購入した。

男の僕は、兜や鎧飾りが欲しいとはあまり思わない。女性の心はちがうようで、妻は大変喜んでくれた。普段の罪滅ぼしだよ。

今はいとおしく

両角　秀子さん（関沢3）

30センチほどの桐の箱に入った私のおひなさま。赤い髪と白い髪の童が鼓を持ち、鶴と亀がのった冠を頭にいただいています。松の木も飾られているところを見ると、お祝いの品のようです。生まれた時、父と母が買ってくれたものですが、まだ戦後の物不足時代で、買うのに苦労したと聞いています。

結婚するときは、ひな人形を持たせる習慣があり、新しい人形を買ってくれ、この人形は実家に置いたままでした。毎年3月には、母が実家の床の間に飾ってくれていました。

母も年を重ね、出し入れが大変になったので自宅に持ち帰り、飾るようにしました。古い人形をいとおしく思います。

豆びなに心を寄せて

田中　須都子さん（鶴瀬西2）

旅行好きの夫婦が、旅の思い出に土鈴・こけしなどをお土産にしていました。ある時、各地に伝承するひなの形式は、土地の風習・文化により異なる事を知りました。ひなの形は違っても飾る心は「子どもの成長と幸福を願う」。この言葉は、私の琴線に触れ、旅先でひなに出合うと買い求めてしまいます。1年に1回の夫婦の旅ですが、40年を経過すると北海道から八重山まで、手のひらに収まる豆ひなが150対ほどになりました。

まだまだ春は名ばかりのこの時期、何とも言えないほっこりとした心の温かさを感じながら、今年もひなたちを飾りました。一堂に並んだひなたちが、私に今年も元気に再会できたことを喜び合う美しい表情を見せてくれるのです。このおだやかな豊かな気持ちを与えてくれるひなたちに感謝しています。

ひなの節句

熊井　則子さん（鶴瀬西2）

私のひな人形は、ケースに入った木目込みの小さな豆びなだ。親が大切にしてきてくれたのに、結婚後は粗末に扱い、虫が食ったり、お顔を少し汚したりしてしまった。おひなさまにも親にも本当に申し訳ない事をしたと思っている。小さいころ、ひなの節句になると、母は、菱餅を模したお菓子や、鯛や野菜の形をした砂糖菓子をおひなさまの前に供えてお祝いをしてくれた。わたしたち姉妹はその前で、習い覚えたおひなさまの歌や踊りを披露して遊んだ。

年月が過ぎ今思うのは、それは宝物の様な時間であったという事である。今年の正月、デパートでひな人形の展示会を見た。いろいろなおひなさまが飾られていたが、どのお顔もやさしく微笑んで輝いて見えた。このおひなさまたちも一人の女の子の成長と一緒に、これから長い時間を生きていくのだろう。

わが故郷のひなまつり

佐藤　せい子さん（関沢3）

私の故郷は、全国的にお米の産地として有名な新潟県魚沼市です。今では、いくつかの村が一緒になって市になりましたが、私が育ったのは、守門（すもん）村でした。そのころの村のひなまつりは、4月3日でした。豪雪地帯であるこの地域では、一か月遅れでひなまつりが行われていたのです。

毎年、初節句を迎える家々では、代々受け継がれてきたおひなさまとおもちゃ、ぬいぐるみまでも一緒にひな壇に飾ります。ご馳走を作り、小学生の男の子たちが、訪れるのを待ち受けます。リュックを背負った男の子たちは、初節句の家を回り、飾られたおひなさまに、一人ひとりほめ言葉を述べてからご馳走を頂きます。そして、お土産をリュックに詰め、お小遣いまで頂戴して、引き上げるのが何時もの慣例です。ひなまつりは、女の子にとっても男の子にとっても、忘れられないこの村のおまつりなのです。

ひなまつりの時季が近づくとあのころが懐かしく思い出されます。

つるしびなの作品と布遊会のみなさん
（前列左から２人めが佐藤さん）